

知的障害児のコミュニケーション力向上をめざした指導

(カリキュラムマネジメントによる言語社会領域の発達)

三好 喜久

(高知県立山田養護学校)

KEY WORDS: 社会性の学習 絵カード 般化

(目的)

対象児童は、知的障害であり、生活年齢12歳5か月、発達年齢は、(H29新版K式)全領域1歳4か月の児童である。言語表出の実態としては、自発言語はあるものの、質問に対して適切に返答したり、呼名に対して返事をしたりすることが難しい。好きな歌も音楽や合図に合わせて歌うことがなく、休み時間や家庭で気分が乗っているときは、好きな歌を歌ったり、周囲から繰り返し促されている言葉を覚えていて発声したりすることがある。小学部6年生になり日常生活の適切な場面で適切な言葉を一つでも多く表出できるようにすることを一年間の目標にかかげて取り組んだ。一年間の取り組みの結果や般化場面を検証し、今後の指導にいかしていく。

(方法)

①社会性の学習

カリキュラムをマネジメントし、今年度は知的グループに在籍しながら、自閉症のグループの授業である「社会性の学習」の授業に参加し、自閉症Bグループの児童とともに、1年間毎週1度の社会性の学習に参加した。順番や受け渡し、買い物など簡単なルールのあるゲームの学習を行うことにより、友達や教師との関わりやコミュニケーションを育てることをねらいとした学習に取り組んだ。

②絵カードによるコミュニケーション

トークンを用い、教師と絵カードの受け渡しを学習し、カードを介してのコミュニケーションの確立をはかった。半年間継続することで、カードを渡すことを覚え、距離があったり、姿が見えないところにまで、カードを使って要求したりすることができるようになること、好きな物を選択することができるようになることをめざした。

③般化の場面の設定

(給食)対象児にとって給食時が、学校生活で一番要求を出することができる場面と考え、「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶の定着をはかるために、絵カードを準備し、絵カードとともに発声することを毎日行った。また「牛乳ください」「お茶ください」のカードも準備し、本人からカードを使って要求を表出することをねらった。

(朝夕の会)毎日の学習がある朝夕の会で、教師が友達の名前を聞いたり、呼名に対する返事を促したりしながら、発語できるよう継続した指導をおこなった。

(排便)登下校やデイサービスでは、紙おむつのため、学校生活では、布おむつの定着をはかった。教師がトイレのサインを見極めて見逃がさず、トイレを促すことから始め、サインの確立をめざした。そして、トイレに行く際には、「トイレ行っていいですか」と必ず一緒に発語してから行くことを徹底して継続し、発語を促す指導をおこなった。

(結果)

①社会性の学習

1年間、毎週一回の社会性の学習への参加で、教員との受け渡しや買い物のスキルを身に付け、言葉を適切な場面で発声することは難しかったものの、ボールの受け渡しや、

お金と品物を交換することなどを覚え、促しなしでも行えるようになった。また、呼名で席を立てて前にできることが安定してできるようになった。

②絵カードによるコミュニケーション

絵カードによるコミュニケーションでは、段階を順にクリアしていき進むことができた。はじめは、カードを渡すことがトークンの獲得につながらず、クリアするのに予定より時間がかかった。カードとトークンがつながってからは、教師との距離が離れても順調にカードの受け渡しができ、段階を進むことができた。残念ながら、トークンの選択の段階からは、時間がなく学習することができなかった。

③般化の場面の学習

(給食)「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつが定着し、必ず発語してから食事をおこない、片付けるために席を立つことができるようになった。また、お汁、お茶、牛乳はカードを取って教師に渡すことが定着し、必ず自分で取り、教師に渡すことができるようになった。特に「お茶のおかわりいる？」の教師の問いかけに対し「いる」「いない」「もういい」「おかわりいる」などの表現で自分の意思を表出するようになった。

(朝夕の会)朝夕の会で、友達の呼名では、姓を言うと続いて下の名前の部分を正しく言ったりすることができた。教師の問いかけにも、2、3の繰り返しで答えるようになった。

(排便)学校生活では、布おむつで過ごせるようになった。排尿のサインも明確になり、自らトイレの場所に向かい用を足しに行くことができるようになったことは画期的である。排便も成功できた。「トイレに行っていいですか」と発声して行く場面も数回見られた。

(考察)

家庭への般化として、毎日の食事の際「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつが定着したという報告をうけた。また、家庭が療育センターに連れて行ったとき、「失礼します」と入室のあいさつを促しなしで言ったという報告をうけた。また、学校での歌唱の場面においても、その場で、曲に合わせてみんなと一緒に歌う場面が数回あり教師達を驚かすことがあった。また、学習した言葉がその場ですぐに発音できることもあった。社会性の学習、絵カードによるコミュニケーション、学級での般化場面の設定、その3つがあいまって、以上のようなコミュニケーションの発達を促したと考えられる。今後継続して指導をおこない、適切な場面での発語や要求を表す言語が増えていくことが望ましい。残念ながら検査結果には表れていないが、3つの方法によって確実に言語量が増し、身辺確立やコミュニケーション力の向上につながった。

(文献)

太田昌孝・永井洋子編著(1992)『認知発達治療の実践マニュアル』日本文化科学社

フロストボンデイ(2005)『絵カード交換式コミュニケーション・システムトレーニング・マニュアル(第2版)』

(Kiku Miyoshi)